

第25回貴重書展「紙という舞台」に際してのミニ講義 「よみがえる伝説～『アーサー王の死』出版をめぐる」

文芸学部教養・基礎教育部門 准教授 小宮 真樹子

1. はじめに：アーサー王伝説の形成

ゲームやアニメ、映画などを通じて、近年アーサー王の知名度が日本でも高まってきました。しかし、彼にまつわる伝承は実に多様です。

アーサーに関する最も古い記録の一つ、829年頃に著された『ブリトン人の歴史』は、彼を「ブリトンの王と共に戦った将軍」と記しています。5－6世紀頃、グレート・ブリテン島にはケルト系の人々と、ローマからやって来た人々が共に暮らしていました。その島に侵入してきたサクソン人を撃退した英雄が「アーサー」だったそうです。

その後、武将アーサーの描写は12世紀半ばのジェフリー・オブ・モンマスの書物『ブリタニア列王史』で大きく変化します。この本は、アーサーという名の王の生涯を詳しく綴った最初の作品であり、彼の誕生から最後の戦い、そして大怪我を負ったアーサーが療養のためにアヴァロンと呼ばれる場所へ旅立つまでが記されています。

ただし、この当時は歴史と物語の境界線がきわめて曖昧でした。ジェフリーの書物も史実というより虚構のような記述が多く、たとえば人間でない父親を持つ賢者マーリンが登場し、超自然的な力でアーサーの父を助けたことになっています。

そして、その後の作家たちもジェフリー同様、アーサーの生涯に自分なりの解釈や創作を書き加えていきました。「王妃と禁断の恋に落ちる騎士ランスロット」や「王になる人物にしか抜けない石に刺さった剣」などの要素が追加され、アーサー王伝説は発展していったのです。

2. トマス・マロリー『アーサー王の死』出版史

数多く存在するアーサー王作品の中、現代に至るまで大きな影響を及ぼしているのがトマス・マロリーの『アーサー王の死』です。この書物は「エドワード四世の治世9年目」、つまり1469年3月4日から1470年3月3日の間に騎士トマス・マロリーにより完成され、1485年7月末、イングランド初の印刷業者ウィリアム・キャクストンによって出版されました。マロリーはフランスのアーサー王作品をベースにしつつ、イングランドの年代記などと組み合わせて物語を編纂し、アーサー王の誕生と円卓の騎士たちの冒険、そして王国の崩壊までを語っています。

マロリーの『アーサー王の死』は当時の読者に人気があったようで、1485年からの100年間で5回も出版されています¹。けれども、時代が下がるにつれてイングランドの人々は騎士道文学への関心を失ってゆきます。1634年から18世紀の終わりまでに一度もマロリーの書物が印刷されていない点からも、出版業界における流行の変化が読み取れます。

ところが19世紀になると、アーサー王伝説は再評価されることになります。まず1816年、約200年ぶりに「ウォーカーズ英国古典文庫」から『アーサー王の死』が出版されました。そしてこの本を愛読していた詩人のアルフレッド・テニスンが『国王牧歌』というタイトルの長編詩を著し、王室のメンバーをはじめとする多くの読者を獲得しました。さらに、当時の芸術アカデミーにセンセーションを引き起こしたアーティスト集団・ラファエル前派もテニスンの詩にインスピレーションを得て、アーサー王と円卓の騎士たちの絵画

を描くようになります。こうして、数百年の時を経て、アーサー王物語は19世紀に再び流行しました。そのような状況下で、マロリーの書物もヴィクトリア時代の人々に広く読まれるようになったのです。

なお、マロリーの物語はキャクストン編集の印刷本だけでなく、筆者の原稿に近いとされるウィンチェスター写本でも現存しております。現在、文学研究においては後者が重視されておりますが、長いこと所在が不明であったため(1934年にウィンチェスター大学図書館で発見)、数百年間にわたってマロリーの出版に大きな影響を及ぼしたのはキャクストン版です。主な違いとしては、キャクストンは物語全体を21巻に分け、さらに章ごとに区分しています。また、『アーサー王の死 (*Le Morte Darthur*)』という題名もキャクストンがつけたものです。近畿大学中央図書館に所蔵されているデント版(1893-94年)とアシェンデン版(1913年)も、キャクストン版に依拠しています。

3. デント版とアシェンデン版『アーサー王の死』

デント版の『アーサー王の死』には、オスカー・ワイルドの戯曲『サロメ』や雑誌『イエロー・ブック』の挿絵で知られるオーブリー・ビアズリーの作品が豊富に使われています。

エクスカリバーを湖へ返却するベディヴィアの絵がとりわけ有名ですが、個人的にはビアズリーの装丁の最大の魅力は、本筋とあまり関係のないデザインではないかと思います。ページをめくるとメデューサ、ハーピー、フォーン、それにマーメイドなど、アーサー王伝説とは関係のない架空の生物が紙面を彩っています。さらにはチェロのような、中世ヨーロッパには存在しない楽器も登場します。

他、ストーリーを忠実に反映していないような描写も見受けられます。たとえば、アーサー王の姉モーガン・ル・フェイの使者が魔法のマントを持ってくる場面は宮廷での出来



図1：アーサーと奇妙なマント。
オーブリー・ビアズリーによる『アーサー王の死
(デント版)』(1893-94年)挿絵。(本学所蔵)

事のはずなのに、ビアズリーは城を背景に描いています。(図1)

このように、芸術的には素晴らしいけれども、時代考証や整合性を気にせず自由にイメージを羽ばたかせているのがデント版の挿絵の特徴です。

それに対し、チャールズ・ギアとマーガレット・ギアによるアシェンデン版の挿絵は、ディテールまで書き込まれたイラストが印象的です。

例としては「アストラットの乙女エレイン」が最適でしょう。彼女は、円卓の騎士ランスロットに恋い焦がれて死ぬ悲劇的な人物です。正体を隠して馬上槍試合に参加しようとしたランスロットは、城主の娘エレインに自分の紋章入りの盾を預けます。若く純情な乙女は彼に一目惚れしてしまうのですが、アーサーの妻グウィネヴィアを密かに愛するランスロットはその想いに応えることはなく、エレインは傷心のあまり亡くなります。けれども、

その美しい亡骸は、ランスロットへ最後の別れを告げる手紙を携え、船に乗せられキャメロットへと送られてくるのでした。

この逸話に、デント版が本文と関連の薄いイラストを添えたのに対し、アシェンデン版の挿絵は物語の一部を切り取ったようです。エレインは靴を脱ぎ、身を擲ってランスロットの盾を潰えています。恍惚と頬を寄せるその姿からは、彼女の度を越した愛情が伝わってきます。あたかもランスロットへの想いに囚われ、命を落とすエレインの末路を示唆しているようです。(図2)

そして特筆すべきは、彼女の背後にある衝立です。よく見ると、この柄は15世紀クリュニー修道院のタペストリーをモチーフにしています。中世ヨーロッパの文化を再現しようと、細心の注意が払われているのです。

その他、デント版が近代英語の綴り (It befell, king, England など) に改めているのに対し、アシェンデン版の本文は中世のスペリング (Hit, befel, kynge, Englonde など) を反映しています。このように、細部まで中世にこだわろうとしているのが、アシェンデン版の特徴のひとつです。



図2：ランスロットの盾を守るアストラットのエレイン。
チャールズ・ギアとマーガレット・ギアによる『アーサー王の死
(アシェンデン版)』(1913年)挿絵。(本学所蔵)

4. おわりに

15世紀にキャクストンによって印刷されたマロリーの『アーサー王の死』は、不遇の時期を経たのち19世紀に再び蘇りました。その流れの中で出版されたデント版とアシェンデン版は、当時の人々がどのように過去の栄光を捉え、解釈しようとしたのかという点からも貴重な書物です。

また、アーサー王に関する本は、近大図書館にも数多く所蔵されています。時代や場所の異なる人々がどのようにアーサー王を描い

ているか、ぜひ皆さんも手に取って楽しんでください。

i 不破有理『アーサー王伝説－19世紀初期物語語集成－別冊解説』2017年、ユーリカ・プレス、53頁。

(受理日 2019年9月2日)